清濁併せ呑む神

2009 年 10 月 10 日
西九州伝道所　佐々木正明

はじめに

日本のプロテスタント宣教の歴史は一世紀半になります。ところが福音はまだまだ受け入れられていません。これからも受け入れられる気配はありません。残念ながらそれが現実です。「信仰だ」「リバイバルだと」叫ぶのも結構ですが、現実もしっかりと見なければなりません。だからと言って悲観的になってもいけません。むしろ、その厳しい現実の中で福音宣教に携わる意義に、心を奮い立たせるのです。どのような状況の中でも、聖霊の力に頼って、忠実に福音宣教を継続する一方、宣教の妨げになっているものを探り出し、それを取り除く努力をすることが、わたしたちの務めだからです。

筆者はすでに「日本の宣教を問う」、「日本人とキリスト教」、「これからの日本宣教」などの拙文において、日本人が福音を拒み続けている大きな理由の一つとして、植民地主義と手を結んだキリスト教宣教があったことを指摘してきました。十六世紀から十七世紀にかけてのカトリック宣教も、明治維新のころに始まったプロテスタント宣教も、共に、西欧植民地主義国家の手先とみなされても、しかたのない一面があったのです。国を守ろうとした徳川幕府が、仏教を利用した厳しい迫害と洗脳にも似た人心操作によって、鎖国を成功させてカトリックを排斥したのは、為政者としてはむしろ当然のことでした。明治政府が、和魂洋才という巧妙なスローガンのもとに富国強兵を進め、すでにプロテスタントに力が移っていた西欧植民地主義諸国と対峙したのも、当時の国家の政策としては間違いだったとは言えないでしょう。残念なことにキリスト教は、世界のほとんどを植民地化し、さらに虎視眈々と日本を狙っていると思われた、これら植民地主義国の宗教だったのです。彼らが行った植民地政策は、実に残虐極まりないものでした。方々から情報を集めていた日本の為政者たちが、植民地主義国の精神的支えであったキリスト教を嫌ったのも、また当然であったといわなければなりません。日本においてキリスト教は、国家的人心操作によって阻止されてきたのです。

この拙文においては、日本がキリスト教を拒み続けている理由を文化の分野に探り、とくに、日本人の曖昧さとキリスト教の厳格さの軋轢に注意を向けたいと思います。それこそ、日本の宣教が進まないもう一つの大きな理由だと判断するからです。そこでまず、①日本の曖昧な文化、よく言えば寛容な文化、「清濁併せ呑む」文化について論じます。次に、②キリスト教の厳格な、融通の利かない白か黒かの文化について考えます。それから、③厳格で融通の利かないキリスト教の文化は、本来聖書が教えるあり方ではなく、キリスト教が長い間滞在していた、西欧の文化をまとったに過ぎないことについて語ります。その上で、④聖書の教えは、日本の文化に非常に良く似た曖昧さ、寛容さを持つものであることを明らかにします。

その聖書を与えて下さった神、聖書にご自分を現してくださった神は、「キリスト教」が説くようなただ厳しいだけの神ではなく、罪の世界に生きなければならない人間の弱さ、足りなさ、悲しさに、あわれみと同情を持って取り扱ってくださる神であること、まさに「清濁併せ呑む神」

であることをはっきりさせます。わたしたちが西欧文化に覆われた「キリスト教」ではなく、聖書の教える神を素直に教えるならば、日本文化との間に大きな軋轢を造ることがなくなり、宣教がより速やかに行われると信じるからです。日本人がつまずいているのは、聖書の神ではなく、西欧の文化なのです。

Ⅰ．日本人の価値観

人間はたいへん複雑な心を持つ動物です。単に動物的本能に任せて生きるだけではありません。たまたま高い知性に加えて理性までも与えられているために、崇高な理想を抱いて清く正しく生きようと努力するかと思うと、その同じ人間が欲望に身を任せて突っ走ってしまうこともあります。丹精こめた生き方をして、すべての人に誠心誠意やさしく尽くしていると見える者が、別のところでは平気で他人を利用し、傷つけ、苦しめて、少しも良心の呵責を感じないのです。善いことをしようとしていて悪いことをしてしまい、悪いことをしようとしていながら善いことをしてしまう。それが人間です。

一人の人間でもそのように複雑なのですから、大勢の人間が集まった地域社会、そして民族あるいは国家全体となると、ますます多様になり混沌としてきます。とはいえ、その混沌の中にも、いくつもの共通要因が生まれ、それが世代を越えて残り、文化として引き継がれていきます。特定の地域社会や民族、あるいは国家には、それぞれに特徴的な文化が形成され、その中に生まれ生きる個々人は、その特徴的文化のなかで独自の人間性形成をし、それを表現して行くようになります。ですから日本の文化の中に育った日本人には、日本人らしいものの感じ方、考え方、受け取り方、判断の仕方、決断の方法、行動の様式、そして人付き合いがあります。個々の人間でそれぞれ異なっていながら、日本人としての共通の特徴を備えているのです。

Ⅰ．A.　日本古来の文化

日本古来の文化、日本人としての特異な共通性は、日本という国の地理的条件や気候などの自然環境に大きく左右されています。他の多くの国々や地域に比べて、日本は穏やかな四季と耕作に適した豊かな土地に恵まれ、稲作を中心とした極めて定住性の強い営みをして来ました。そのために、何ごとでも地域社会が一致協力して行う、固い絆に結ばれた共同体意識が育成されたのです。また四方を荒海に囲まれて孤立していたために、長い間、他の民族や国家からの侵略や干渉をほとんど受けずに、独自のあるいは特異とも言える文化を形成することが出来ました。その独自の文化は「和」という言葉で表すことができるでしょう。人々が和合して生きることを最善最高の価値とすることです。もちろん、程度の差こそあれ、どこの民族にも「和」の意識はありましたが、日本ではそれが社会をまとめ、個人を支配する「中心的思い」とまでなったのです。「和をもって貴しとす」と言われた通りです。

「和」は円滑な人間関係をすべての物事の上に置く文化です。円滑な人間関係を構築し、これを壊さないように、あらゆる努力をするのが日本人です。確かに、日本でも戦（いくさ）がくり返されてきたのは事実です。でも、同じたぐいの体制をもった同じたぐいの民族が、互いに名乗り合い、仁義を尊んで戦う戦など、世界の戦争に比べるとたらいの中の嵐にすぎません。戦国時代の戦にしても、敵を皆殺しにしてしまおうなどという魂胆を持つ武将はなく、だれが支配権を握り世の中を平定するか、つまり、より広い「和」を作り上げることができるかの問題に過ぎませんでした。ところが、日本以外の大概の民族や国家は、他の民族や国家と陸続きであったため

に、彼らの体験した戦いは、異なった人種、異なった言語、異なった文化、異なった体制の民族が戦うものでした。仁義も人の道もありません。おんな子どもを含めて、文字通り皆殺しの瀬戸際、民族滅亡の危機を幾度も通りぬけてきたのです。日本が歴史上体験した異民族異文化との戦いは、第二次世界大戦を別とすると、唯一、元寇の侵略でした。これを阻止しようとした鎌倉武士が、名乗りもあげずに卑怯な武器で卑怯な戦いをする蒙古兵（実際にはモンゴル人は少なかった）に、肝を潰した程度のことだったのです。あえて挙げるならば、東北北部、北海道、千島列島に先住していたアイヌ民族との抗争もありましたが、ほとんど、松前藩だけの問題に限られていたうえ、抗争自体が小規模で、日本全体に対する影響はありませんでした。

艦隊と航空機が発達し、四方の荒海によっても保護されなくなった日本は、第二次世界大戦で異民族に敗北しました。そのとき日本人は、たしかに鬼畜と賤しんだ敵国の支配と日本文化の壊滅を恐れました。ところが連合国、特にキリスト教的人道主義に立つアメリカなどの穏やかな取り扱いと支援によって、日本はたちまち国家としての力を回復し、その独自の文化も外圧によって破壊されることはなく、かえって、西欧文化の「よいところ取り」をしながら今日に至るまで持続することができたのです。

こうして、誰にも妨げられることなく「和」の文化を高めてきた日本人は、この「和」のために、多くのものを犠牲にすることさえ厭わなくなりました。他人と仲良くするためなら、平気で嘘をつきます。人との協調のためなら、いとも簡単に事実を曲げてしまいます。人間関係にひび割れを作らないためなら、善悪の境を限りなく曖昧にします。円滑に付き合うためなら、白を黒と言いくるめます。隣人との軋轢をさけるためならば、善と悪の境を限りなくぼやかし、事実も覆い隠します。そのような感覚が、国会や閣僚から官僚、地方公務員、大企業、中小企業、零細企業、そして子どもたちの間にまで浸透しています。「臭いものには蓋をしろ」、「長いものには巻かれろ」、「たつ鳥後を濁さず」、さらに最近では「空気を読む」などという、「事なかれ」の知恵が、日本では社会通念になっています。

常に他人を意識し、よい意味では他人の立場で物事を考え、悪い意味では他人の目を気にしながら生きています。みんなが赤信号で渡りだすと、一人だけ青になるのを待つのは並大抵のことではありません。他人と意見が異なることが怖いために、自分から発言することは控え、まず、他人の言うことを聴き、強い人の言葉には唯々諾々と従ってしまいます。良く言えば、あまり自己主張をしないで、遠慮という美徳を発揮するのです。日本という国に生まれ育った日本人にはあまり気づかれないことですが、他の文化から眺めてみると、こんなことが非常に不思議であり特徴的なのです。

これは、家族親族同士の助け合いこそが、人生で最も大切であると考える東南アジア諸国の文化では、人々が、家族のためならば嘘もつき、泥棒もし、えこ贔屓して公共のポストも与え、袖の下もおおいに用い、女の子なら、身を売ることにも何の罪悪感を持たないのと、共通するところがあります。自分たちが最も大切だと考えるもののためには、他の事柄を曲げ、否定し、犠牲にしてもかまわないという感覚であり、人生の価値観に関わる問題です。一般的に言って、東南アジアでは家族親族の助け合い、日本では共同体の和です。その共同体は、あるときは家族であり親族であり地域社会であり、国家です。しかし、ひとたび自分たちの共同体に属さないと判断した人間に対しては、日本人は恐ろしいほど残虐になれるという特徴も備えています。内輪の人間に対しては紳士的で優しい日本人が、第二次大戦のときには、他国他民族に対してあれほど無慈悲になれたのです。

I．B.　渡来の文化

非常に強い定住生活をしていた上に海によって適度に隔離され、他民族の侵略を受けたことがなく、独自性を保ちながら他国や他民族に学ぶことができた日本人は、「和」を至上の価値としてきました。とはいえ日本は、大陸から完全に隔離されていたのではありません。荒海を乗り越える危険さえ冒せば、他国に学び、自分たちに都合の良いもの、有益なものを積極的に採り入れて、発展させることが出来たわけです。日本人が積極的に外国から採り入れた中で、特に大きなものに、まず、仏教がありました。

仏教には、行くところ入るところで、その土地の文化に適応してどんどん変化する特徴があります。ですから、日本が採り入れた中国仏教はすでに本来の原始仏教からは程遠く、いろいろな変化を経ていたもので、キリスト教の教えさえ混入していました。それを日本人が採り入れたとき、日本人はさらに自分たちに合うように自由に変化させ、「日本仏教」をつくりあげたのです。それは仏教という「一つの教え」ではなく、実に多種多様な教えを持つ様々な宗派仏教でした。教義的適にはまったく相反する様々な仏教ではありましたが、大衆としての日本人はこれを「一つの通俗の仏教」として、ごく普通に受け入れたのです。僧侶たちも激しい論戦や争いもなかったとは言えませんが、全体としては、平和共存を選んだのです。とことんまでは遣り合わないのが、「和」を貴ぶ日本の社会の益になるからです。論戦と異端追放を繰り返した、西欧のカトリックやプロテスタント・キリスト教とは、かなり異なっていたのです。

それまで素朴で曖昧な民間信仰、あるいは単純な宗教心の表現に留まっていた神道の不足を補って、日本社会に定着することが出来たのが仏教です。仏教の到来は、当然、在来の神道と様々な軋轢を生み出しましたが、全体的に見ると古来の「和」を壊すことなく、仏教的世界観、死生観、人生観、価値観を人心に浸透させたのです。積極的に仏教を採り入れた聖徳太子でさえ、神道を排斥しようしたのではありません。かえって二つの宗教の和合を図ったのだと思われます。十七か条の憲法の第一条で、「和もって貴しとなす」と定めて日本人の心を表現し、これをもって政治の理念としようとしたのです。（一応十七か条の憲法を聖徳太子の作と考えて）「和」を心とする日本人と、行く先々の文化や宗教を採り入れていく仏教の性格が、古来の神道と仏教の平和共存を可能にしたのは当然のことでした。結果として日本人は、生まれながらに氏子であり、つまり、神道の信徒であり、同時に仏教徒となり得るのです。日本人の宗教意識の中には、古来の神道的感覚と渡来の仏教的感覚が入り混じっています。

次に日本が採り入れた大きなものに、朱子学がありました。朱子学は儒教の一部ですが、日本には、仏教と混じって伝来したものです。朱子学は天と地という発想から、徹底した身分制度を教えるものでした。鎌倉時代には、後醍醐天皇がこれをもって自分の政権のために戦ったことが知られていますが、思想としてあるいは教えとして、民衆の間に広まることはありませんでした。ところが天下統一を成し遂げ、一つの国家としての体裁を確立しようとした徳川幕府は、武家社会を統率する新たな倫理として、それまであまり省みられなかった朱子学を採り入れ、これを国学として定着させました。朱子学を採り入れた理由はいくつもあったことでしょう。けれども、「仲良く暮す」ことを最高とする日本古来の価値観からくる曖昧な倫理では、多くの大名たちを従え、強烈な中央集権制度を確立して、それを継続させるには不十分と感じたのかもしれません。

朱子学は古来の日本のおおらかで曖昧な世界観、人生観、あるいは生き方や倫理に対し、厳格な世界観と価値観あるいは人生観を持ち、いわゆる、忠孝を中心とした身分制度に立つ清廉な倫理を教えました。徳川幕府は、西欧植民地主義国の侵略を防ぐ手段として、仏教を優遇してカト

リックを弾圧しながら、徳川家を頂点とした縦割りの武家社会、主従関係、身分制度の確立、さらには象徴的権威を認めた朝廷との関係の温存のために、朱子学を用いたのです。

Ｉ．C.「和」を基盤とした混合文化

このようにして日本では、一般庶民の古来の緩やかな倫理観と、武家社会を中心に広められた統制のための厳しい倫理観が、中途半端に混ぜ合わされ、互いに馴染まないまま受け入れられてきたのです。たとえば、武家社会での性倫理と庶民の性倫理はまったく異なっていました。「二夫にまみえず」などという武家のしきたりは、一般庶民の間ではまったく通用せず、武家社会でも、力あるものたちに都合よく用いられていたに過ぎませんでした。自分の立場が変わると、まったく異なった倫理観に早変わりすることもできたのです。徳川時代が終わっても、新政府は「男女七歳にして席を同じうせず」と、朱子学の教えを国民に定着しさせようとしましたが、一般庶民は、それを「建前」として受け取り、本音は古来のおおらかな性倫理を持ち続けたのです。

言葉を変えると、非常に厳格な朱子学でさえ、古来のおおらかな倫理、あまり厳しいことは言わず、とにかく仲良く生きようという感覚に、飲み込まれてきたと言えます。将軍家治の時代、老中田沼意次（おきつぐ）の賄賂政治に辟易した人々は、彼の失脚と松平定信の登場に喝采を送り、「田や沼やよごれた御世を改めて清くぞすめる白河の水」と歌いました。(「田や沼」は田沼意次、「白河」とは松平定信が藩主だった陸奥国白河藩、白河を清流とかけた）ところが、定信のあまりにも清廉潔白な朱子学政治にたちまち嫌気をさし、「白河の清きに魚の住みかねて元の田沼の濁り恋しき」と意次を懐かしむ戯れ歌が流行ったわけです。(田沼意次についての評価は大いに分かれます。また、戯れ歌にも幾通りのものがあります。）それで日本人は、しばしば朱子学的な厳しい倫理にならって品行方正であり、目上の人を敬い、礼儀だの作法だのにうるさく勤勉でありながら、何事にもけじめがなく、だらだらと、はっきりしません。「やあやあ」「なあなあ」で済ませてしまうのです。他人を傷つけ、人間関係にひびを入れることを極度に恐れるために、大人たちは自分の子どもたちに、「何をやってもいいけど、他人の迷惑になることだけはするな」と諭します。何をやってもいいという超倫理あるいは脱倫理を認めながら、他人に迷惑をかけるという一事だけは、死守せよと言うのです。

たしかに、清く正しい生き方を主張し清廉潔白な人生を送ろうとする者も、日本人の中にいないではありません。むしろ、多くの国々に比べてそのような人間が多いと言えるかもしれません。じっさい、少し前の日本は世界でいちばん治安の良い国でした。いまでも、たいていの国々よりはよほど安全で犯罪も少ないのは間違いありません。(まだ成田空港がなかった時代、筆者はたびたび羽田空港を利用したものですが、手荷物を通路の横に残してレストランに入るのがふつうでした。盗まれることなどあまり考えなかったのです。今はそうも行きませんが・・・)。清廉潔白一点張りの人間、やたらに正義感の強い人間は、「若い」「青い」「世間を知らない」と疎んじられて、「人間味がない」「物事が見えていない」と蔑まれてしまいます。だからといって、汚れ穢れたままの人間が敬われるのではありません。一方では高潔な理想を持ち、高い倫理観を持って自らを律していながら、他方では泥まみれの汚い人間を理解しいとおしむことができる人、いわゆる、「清濁併せ呑む」人、「酸いも甘いも噛み分ける」人、「巾があり懐の深い」人が最も望まれる人物像となるのです。敗戦後の物資の乏しいときに、闇米を口にすることを潔しとせず、餓死した裁判官がいたことは良く知られています。このことを聞いた大抵の日本人は「なんと愚かなことを」と思う一方で、同じ日本人にそのような人物がいたことを、ひそかに誇りとしたのです。

日本人は、善と悪とは紙一重、世の中には完全な白も完全な黒もなく、すべて灰色であると考えています。どんなに努力して清く正しく生きようとしても、どこかで悪を行い他人を傷つけてしまい、いかに極悪非道な人間になろうと決意して、闇の世界をひた走りに走り続けても、知らないうちにどこかで人を助け、善いことをしてしまっていると、感覚的に理解しているのです。ですから、日本人は、一方では崇高な倫理観を持ちながら、他方では明白な善悪の基準を設けることに賛同しません。たとえ裁判所があっても、厳格な法的解釈で裁いて白黒の決着をつけるのではなく、講談の大岡裁きに現れているように、また現代の裁判の判決や和解調停に良く現れているように、ものを言うのは人情であり、やむを得ず罪を犯した者に対する同情と理解、犯罪人の立ち直りを願う心です。絶対に白と言い切らず、決して黒と断定せず、余裕と巾をもって両方を受け入れ、人付き合いを穏やかにし、社会を滑らかにしようとすることこそ理想なのです。「喧嘩両成敗」が受け入れられ、「三方一両損」がよい解決法なのです。暖かく人情味あふれる人間関係、互いに迷惑をかけることを避け、それぞれの生き方を尊重しながら、和気藹々と生きることこそ、人生最大の価値と感じてきたのです。それは、自分たちの暮らしの益になるものならば、どんなに倫理的に卑しくても良いものであり、自分たちの暮らしのためにならなければ、たとえどんなに倫理的に崇高であっても悪であるという、実利主義につながります。日本人の「和」は、まさに実利主義なのです。昨今は物事が西欧化し、厳格な文字の定義に固執して、実利と和を無視した法解釈が語られるようになりつつありますが、それに違和感を持つ日本人が多いのです。

人間関係を穏やかに済ませようとする日本人の感覚は、当然、善悪を曖昧に済ませることにつながります。政治家や事業家が悪事を行った場合、テレビなどの謝罪でも本当に謝罪している例はわずかです。たいていは、やってしまった悪いことを認めて、はっきりと謝るのではなく、「世間を騒がせ、心ならずとも皆様に迷惑をかけてしまったことをお詫びします」などと、ごまかしてしまいます。悪いのは世間を騒がせたことではなく、罪を犯したことのはずです。それなのに、これでは悪いのは罪を犯した人ではなく、告発して世間を騒がせたほうになってしまいます。でも日本人は、そのような謝罪でさえ受け入れて、「ことは済んだ」と収めてしまいます。罪を明確にして責めることをよしとしないのです。

ところが、これが国際社会になるとそうは行きません。たとえば戦争責任を取り上げると、ドイツは自らの戦争犯罪を、国際社会に対してはっきりと謝罪しました。それが近隣諸国に受け入れられたのです。これは UE を成立させるためには絶対に欠かせないことでした。ところが日本の謝罪はなんとも曖昧です。日本人同士ならばなんともぼやけた謝罪でも、互いに了承して受け入れられますので、日本人はこれで謝罪は済んだと思っていることでしょう。しかし、国際感覚では日本の謝罪は非常に不明瞭で、とても真剣に謝罪しているとは思えない代物なのです。それで、近隣の国々の中には、相変わらず「謝罪せよ」と言い募る人々が、後を絶ちません。それに対して、「何回謝罪させれば気が済むのだ」と、逆切れして腹を立てる日本人が多いのです。そのために多くの国々が、いまだに「謝罪のない日本」、「戦争責任をあいまいにする日本」の再軍備と核化を懸念し続け、アジア経済共同体などの話も進展しないのです。これは諸外国の人々だけでなく、当の日本人さえも気づいていない、日本人の価値観に関わる問題です。

Ⅱ．日本に伝えられたキリスト教と受け皿

日本に伝えられたキリスト教は、原始キリスト教そのままのキリスト教ではありませんでした。仏教ほどではないにしても、行く先々、入る先々の文化に応じて変化してきたキリスト教です。特にプロテスタント・キリスト教は、聖書という書物を唯一の聖典として、これの厳密な解釈と

適用を最重要課題として来たために、変化は最小限に止められてきました。文化に対する適応は、聖書の基本的教えに変化を及ぼさない限りにおいてしか、認められなかったのです。ですから、仏教宗派のように、基本的な世界観や価値観を含めて、何から何まで違うと言うようなものではありません。とは言え、日本に来たキリスト教は、西欧諸国の文化、特にアメリカの文化の影響を色濃く反映したものでした。

Ⅱ．A.　ピューリタン的キリスト教

日本に到来したプロテスタント・キリスト教は、ピューリタン的要素が強く、清く正しい生活を強調し、清廉潔白な生き方を尊ぶものでした。それが、一部の日本人たちには大いに歓迎されたのは事実です。特に、廃藩置県のために、実際生活にも精神的にも行き場を失っていた武士階級の中には、自分たちが尊んできた儒教、ことに朱子学の完成として歓迎する者が多く現われました。彼らはそこに斬新な希望を見いだすことができたのです。熊本バンド、横浜バンド、札幌バンドという日本の初期のキリスト教の三大拠点は、ほとんどみな朱子学を尊んで来た武士階級の集まりです。

ピューリタン的キリスト教は、開国したばかりの日本で、願ってもない受け皿を得たわけです。高度に倫理的な教育を受け、読み書きに不自由しなかった武士たちは、ピューリタン精神をさらに高揚することができました。新渡戸稲造が著した「武士道」などは顕著な例です。実際、多くの国々のキリスト教を見ると、日本のキリスト教がいかに倫理的な宗教であり、高い倫理基準を保っているかが一目瞭然です。同じピューリタン的キリスト教が入ってきても、受け皿がなかった多くの国々では、倫理的に高いキリスト教を定着させることは、とても困難だったのです。

Ⅱ．B.　ホーリネス運動

アメリカにおけるピューリタン的キリスト教は、やがて、ホーリネス運動という後押しを得、より高い「清め」、あるいは「聖め」の動きとして発展して行きました。いまでは揶揄と嘲笑の的となることが多い禁酒法も、このピューリタン・ホーリネスの精神的背景があって、制定にこぎつけることができたものです。日本において最適な受け皿を得たピューリタン的キリスト教は、さらにホーリネス運動の伝播によって、世俗と戦うキリスト教のイメージを強くして、人々の尊敬を勝ち取ることになったのは確かです。しかし一方では、「酒たばこ飲まぬ吸わぬの耶蘇教（耶蘇教＝やそきょう＝キリスト教）はああ面倒な宗旨なり」と揶揄されるほど、一般社会から遊離することになったのです。酒たばこをたしなまないキリスト教は、「元の田沼の濁り恋しき」と歌った日本の大衆には、いささかうとましいものでもあったわけです。

もちろん、日本に伝えられたキリスト教すべてがピューリタン的、あるいはホーリネス的なものであったわけではありません。日本のプロテスタント・キリスト教にはまもなくドイツ神学が流れ込み、多くの教会が様変わりしていくことになりました。ただ、キリスト教にたいする一般のイメージは、やはり「高潔」、「清廉潔白」に留まっていました。神学的理解はドイツ的になっても、朱子学と融合したピューリタン的キリスト教の高い倫理的側面は、あまり失われないまま現代に至っているのです。

Ⅱ．C.　白か黒かの宗教

そのようなキリスト教の特徴を通俗的に表現すると、白か黒かの宗教です。善か悪か、嘘か真

か、正か邪か、罪か罪でないかの世界です。ピューリタン的ホーリネスの影響下にある「成長した」クリスチャンたちには、この世の中には善でもなく悪でもないものが存在するなどと考えるのは、非常に難しいことです。今日は善で明日は悪になる事柄が存在することも分かりません。場所が変われば善にもなり悪にもなるなどということには思いも及びません。おなじことをしたとしても、相手によっては罪ともなり、義ともなりことがあることなど、とても考えられません。そのようなことを少しでもほのめかすと、たちまち「状況倫理」ではないかと噛み付かれてしまいます。彼らの論理は簡単です。神は絶対の善であり、誤りない神のみ言葉である聖書の教えも絶対に善である。したがって聖書に反することは絶対に悪であるというわけです。こういう感覚からは、初対面の人物をいったん「良い人」と思い込むと、いつまでも良い人であると思い続けることにつながります。善い人は善い人であって、同時に悪い人ではありえないからです。アメリカ人宣教師が、第一印象を非常に大切にするように感じるのはそのためです。（アメリカ人と御付き合いをしたいと考えている人はご用心)。

アメリカ人やその影響下にある伝道者たちが、自分たちの言うことが正しいと主張するとき、つまり、自分たちは白だと言い張るとき、しばしば「聖書的」という言葉を口にします。でも多くの場合、それは、はたして彼らが言っていることが、聖書の教えかどうかという問題ではありません。彼らが持っている、自分たちは聖書に従っているという自負もまた、聖書がそのように認めているかどうかには関わりません。むしろ、彼らがそのように聖書を読み、そのように理解したというに過ぎず、聖書の語っていることとは異なっている場合が多いのです。彼らには、聖書にある記述や教えさえも、読む人によって理解が異なり、立場や背景によって解釈が異なることが分かっていないのです。ましてや文化が異なると、文化的な理解の相違が出てくるのです。アメリカ人は、アメリカの文化背景によるアメリカ人の常識と感覚で聖書を読み、アメリカ人の考え方と生活に都合が良いように解釈した上、同じアメリカ人同士が、「そうだそうだ」と納得しあうために、自分たちは聖書的だと信じ込んでしまうのです。残念なことに、そのようなことに気づくクリスチャンは、西欧にも日本にも滅多にいません。

Ⅱ．D. 移住性社会と事実の重要性

このように、すべてのものごとを善か悪か白か黒かと、明白な線を引いて考える傾向は、移住性の強い生活を続けた人々にかなり共通します。移動生活をしていた人々、たとえば砂漠を行き来して生きていた人々、あるいは広大な土地を幌馬車で移動していた人々には、今日出会った人に再び会える保証はなかったのです。売り手の事情や将来への期待を考慮する余地はなく、掛売りなどは論外でした。そこで大切なのは、品物が良いか悪いかという単純な「事実」だけでした。言葉も文化も民族も違う人々と常に接触して、身振り手振りも交えて交渉し、品物を売買しなければならなかった彼らには、複雑な人間関係に配慮する手立てがなかったために、ただ単純に、いまある事実を売買の基盤としたのです。そこから、生活のあらゆる面で事実に基くことを原則とする、単純明快な文化が形成されてきたわけです。当然、そこでは事実に反するのは悪いことだという、安易な思考に偏りやすくなったわけです。

ところが、狭い地域社会で生まれその同じ土地で死ぬのが普通であった、定住性の強い社会の人々の間では、細やかな情緒的付き合いが発展しました。長い付き合いと信用を前提とした掛売りが当たり前です。今は少々品が悪くても、作った人の事情や家庭環境までも思いやり、将来の熟練を期待して、ここは配慮をもって高い値で買っておこうという、出世払い、人への投資もよくやられていたことです。やり取りすべてが、長い間一緒に住むことを前提としているのです。

そんなわけで、定住性の強い社会では、人間関係を土台とした社会が築かれるようになったのに対し、移住性の激しい社会では、事実を土台として物事を進める社会が築かれることになりました。非常に定住性が強く、人間性の細かなひだ、思いやりだとか配慮だとか言うものを、この上なく尊ぶのが日本の文化です。そしてこの日本に入ってきたキリスト教が、事実を大切にする文化で色づけされたキリスト教なのです。好むと好まざるとにかかわらず、他民族・他言語の人々との接触を繰り返してきたかなり移住性が強い社会で、少しでも油断すると騙され、攻撃され、侵略される危険性もある中で、そのような状況に合うように理解され、形成され、構築されてきたキリスト教だということです。たとえ聖書を大切にし、聖書の教えに立ったキリスト教であると言っても、そのような背景を持った人々が読み、また解釈した聖書なのです。そしてそのような環境にあっては、彼らなりの聖書の理解とその理解の適用が、彼らの社会の腐敗を止め、彼らの文化をより美しいものとして行く、大きな力となったのです。しかし、異なった文化に移されたとき、そのような聖書の理解と適用の多くは用を成さなくなるばかりか、害をもたらすものとさえなってしまうのです。

Ⅲ．日本人として聖書を読む

ですからわたしたちは、他の文化の感覚で読まれ、理解され、適用されたキリスト教をいつまでも抱え込むのではなく、まず、日本人の文化の感覚で聖書を読み始めなければなりません。聖書を素直に読むと、少なくても普通の日本人が日本人的な感覚で読むと、聖書がピューリタンやホーリネス的な清廉潔白を教えているとは、とうてい思えないはずです。物事すべてを白黒で考え、善か悪かで判断し、真実か嘘かを問うような宗教は、聖書からは出てこないだろうと思われるはずです。筆者は、北海道という、ある意味で日本らしい文化が希薄になった、「新天地」で育ちました。しかも、家族とか親族というものの密接なつながりを、あまり体験できない環境で生きてきました。そのために、ごく簡単に、西欧的個人主義のキリスト教を受け入れることができました。そして長い間、西欧人によって理解され構築された、白黒、善悪、嘘真のキリスト教にも、あまり違和感を持たずに来ることができたのです。

それで、東京の聖書学校に入ると、日本の保守的文化が非常に強い関西出身の学生たちと、まったく意見が合わなくて驚いたものです。筆者が、「聖書にそのように書いているのだから、それでいいではないか」と論じると、関西出身の学生は、「確かに聖書はそう言っているけれど、そんなことでは世間で通用しないから・・・・」というわけです。わたしたちは共に、まだまだ生半可なクリスチャンだったわけです。それがどうもおかしいと感じ始めたのは、沖縄の僻地、そしてフィリピンの山岳奥地という異文化の中で、宣教の働きを始めてからのことです。徐々に、西欧的な聖書の読み方を横に置き、フィリピンにいたときにはフィリピン的な感覚で読む努力をし、日本に戻ってからは日本の文化を改めて学び直して、日本人的な目、日本人的な感覚で読むように心がけてきたのです。

Ⅲ．A．日本人として聖書を読むことの難しさ

多くの日本人は、それがクリスチャンであろうと一般の日本人であろうと、まっさらな日本人感覚で聖書を読むことは困難です。まず聖書は「物凄い」大冊です。しかも多様な形式で書かれた豊富な内容で、実に変化に富みます。だから、そのまま読んだのでは何が何だかさっぱり解らないというのが、正直なところです。そこで、たいていの人はわずか読んだだけで投げ出してしまいます。それでもどうしても読みたいと思う人は、案内書を手に入れたり、解説を頼りにした

りして読み出します。あるいは牧師などの教えを手がかりに読むことになります。解説書や手引きだけ読んで、聖書を読んだつもりになっている人も、少なくないようです。そしてその手引き、解説、牧師の教えなどすべてが、西欧的な理解の上に立ったものであることに気づかないでいるのです。西欧的なキリスト教の聖書理解を我慢して受け入れることができる人は、クリスチャンにもなれるわけです。しかし、それに違和感を持つ者は、クリスチャンになるどころか、聖書そのものを棚の隅に置いて埃が積もるままにしてしまいます。日本の家庭の大多数には、一冊くらいの聖書はあるそうです。それで、クリスチャンもクリスチャンでない人も、聖書に触れた人たちのほとんどは、日本人的な感覚で聖書を読み、日本人的な文化背景と理解で聖書を解釈することができないままに終わるのです。

クリスチャンになれなかった日本人は、「キリスト教の神は、厳しい中近東の自然環境に生きる人々の文化から生まれた、『厳しい父なる神』であり、優しく穏やかな自然環境で、寛容な文化を作り上げてきた日本人にはふさわしくない。日本人に必要なのは厳しく拒絶する父なる神ではなく、優しい神、すべてのものを暖かく受け入れ、覆い、包み込む『母なる神』である」というような言い方に、納得してしまいます。クリスチャンになることができた日本人は、もともと西欧的なものにあまり違和感を持っていなかった人、あるいは西欧的なものに憧れを持っていた人が多いため、クリスチャンとしての成長をするごとに、いよいよ日本人的な感覚を失い、少なくても聖書理解と信仰という面では「穏やかな洗脳」を受けて、日本人の感覚から遊離してしまうのです。

Ⅲ．B.　どうしてもしなければならないこと

日本人として聖書を読むことは大切ですが、それは問題解決そのものにはなりません。むしろ解決への第一歩にすぎません。韓国人が韓国人として聖書を読み、インドネシア人がインドネシア人として聖書を読み、世界中の人々がそれぞれ自分の文化と常識で聖書を読み、それぞれが理解したものを持ち寄って比べ合わせ、より正しいと思われるものを選択しなければならないのです。ただ、今のわたしたちに出来るのは、まず西欧化したキリスト教からの脱却です。

日本人として聖書を読みながら、より正しい聖書理解に到達するために、もう一つ、どうしてもしなければならない大切なことがあります。それは聖書が書かれた文化背景、事情などを出来るだけ知った上で読み、理解することです。聖書は、まっさらな歴史、まっさらな環境、まっさらな事情、まっさらな人間に対して書かれたものではありません。特殊な歴史、特殊な環境、特殊な事情、特殊な人々に対して書かれたものです。それを理解することが大切なのです。

たとえば、「キリスト教の神は、厳しい中近東の自然環境に生きる文化から生まれたので、厳しい神だ」と言われたとき、それがどれほど事実であったか、良く知らなければなりません。厳しい自然環境は厳しい神観念を生み出し、優しく穏やかな自然環境は優しい神観念を生み出すという理論は、神は人間が創造（想像）したものだという前提に立つものであり、わたしたちは認めることができません。また現在の荒々しい中東の自然と、三、四千年前の中東の自然が同じであったと考えてはなりません。当時の中東にはもっともっとたくさんの森林があって、肥沃な三日月地帯と呼ばれ、現在のように荒れ果ててはいなかったからです。人々がレンガを焼く燃料として、あまりにも大量に木々を伐採してしまったために、荒地となり砂漠化した部分も多いのです。ただ、環境が神観に影響を与えるという考えは、あながち見当違いばかりではありません。神は環境や実情に対応してご自分を現してくださいますので、厳しい環境にあっては凛とした側面がより多く現され、穏やかな環境では優しい面がより強く表現されることは当然です。

同じ父親でも、家族みんなで居間にくつろいでいるとき、寝っ転がって赤ちゃんの足の裏をくすぐっては面白がっている、いささか怠け者で腑抜けの父親と、水かさが増した川に溺れた長男を見つけて、一目散に駆け寄り、着物も脱がずに激流に飛び込んだときの、勇ましくも凛々しい父親の姿は違います。神の姿も、状況によって異なって現されているのです。人々はそのような様々な状況の中で神を知るのですから、神の理解が自然環境に影響されるのは自然なことです。ある特定の状況の中の神だけを見て、早合点してはならないのです。

定住性の強い生活の中からは、人間関係に重点が置かれる文化が発生し、移住性の強い生活の中からは、事実に重点を置く文化が形成されるというのは一般的な事実ですが、聖書自体が、定住性の強い生活の中で書かれたものか、移住性の強い文化の中で書かれたものかを知ることも大切です。移住性が強ければ、白黒をはっきりさせる倫理面が強く示され、定住性が強ければ、人間関係に配慮した穏やかな倫理性が強く教えられていると考えられます。結論的に言うならば、聖書は極めて移住性の強い文化を背景としながら、定住社会を目指して団結する中で書かれたものです。ですから、聖書には両面が説明なしに記されていると考えられます。

旧約の律法が与えられた頃、中東には移住性の強い民族が大小ひしめいていました。彼らは互いに通商を行いながら、いつ攻撃され侵略され、征服されるか分からない恐れの中に生活していました。イスラエルはそのような中の弱小民族のひとつとして、ただただ、神の助けによって生き延びていたのです。やがて彼らが定住した約束の地カナンは、いわゆる「肥沃な三日月地帯」に属し、多くの移住性の激しい民族に取り囲まれていただけでなく、古代世界の、人類交流のハイウエイとも言われたほどの場所でした。そのような中にあって、将来、救い主を生み出す民族としての特別な使命、天地を創造された正しい神を礼拝する唯一の民族として生き続ける、重要な役割を与えられたのです。そのために、偶像礼拝をしていた他民族との交流も、厳しく制限されました。また、絶えず他民族の侵略の危機にさらされていたために、非常に厳しい律法によって拘束されていました。いうならばイスラエル民族は、キリスト誕生に至るまで２千年以上にわたって、まるで戒厳令の中に生活してきたようなものだったのです。そこに見られる神の姿は、当然厳格この上ない神でした。

イスラエル民族は、また一方では、非常に強い定住型の民族でもありました。彼らは、神が永遠に与えると約束された土地に住み着いたのです。絶対にその土地から離れない決意が、民族全体にみなぎっていました。部族ごとに分割され、家系ごとに与えられ、家族ごとに分けられた土地は、出来るだけ所有権が変わらないように配慮されていました。外部の民族に対しては非常に厳しい警戒を崩さずに生きながら、内部においてはとても細やかに人情が通う、人間関係主体の生活が営まれたのです。どの民族にも多面性があり、一つの文化の中にも、互いに相反するようなものもあるのですが、イスラエルにあってはそれが極端なほどに現れているのです。イスラエル民族が、貧しいもの、孤児、寡婦、あるいは寄留者や土地を持たないものに対して、どれだけ細やかな配慮がされているかは、２１世紀の福祉国家さえ見習うべきところがあるほどです。イスラエルの律法で最も大切なものは、まず、唯一の神を愛することでした。これが誤った神礼拝であった偶像礼拝を厳しく退け、偶像礼拝をしている近隣民族を激しく排斥することにつながったのです。第二に大切な律法は隣人を愛することでした。隣人を愛しいつくしむことが、人間社会のあらゆる規律、あらゆる法律の基盤、中心とされたのです。そして、この第二の戒めは、第一の戒めが固く守られることによってのみ、正しく行われるものだったのです。

このように聖書には、神の厳しい側面と優しい側面が、説明もなく共に記されているのです。

そのため、聖書を読むものがどちらに偏って読むかによって、理解と判断が大きく異なるわけです。移住性の激しい白黒の文化で育った者が聖書を読むと、自然に、自分の感覚に馴染む読み方をし、定住性の強い人間関係重視の文化に生きる人は、自分たちの生活に都合よく読み取る傾向になるわけです。ただ、日本人は定住性が強いにもかかわらず、聖書を読む前に、まず、移住性の激しい欧米ピューリタン的なキリスト教に触れ、それを朱子学の受け皿で捕えてしまったために、本来の自分たちの文化感覚で聖書を読めなくなっているということなのです。

また聖書の倫理を理解するためには、この共同体全体という意識とその中に生きる個人という意識の、両方を見なければなりません。これも、ここでは結論的な表現に止めますが、聖書は、個人としての人間の弱さや欠点に対しては非常に寛容でありながら、やがて救い主を生み出す民族、天地創造の神を礼拝する民族の共同体を破壊するような罪に対しては、非常に厳しいといえます。とはいえ、そのような罪に対する厳しさの中にさえ、個々の人間に対する寛容な配慮を窺がうことができます。

Ⅳ．清濁併せ呑む神

日本人の多くは、ピューリタン・ホーリネスの流れを汲む朱子学的クリスチャンに対して、相反する二つの感情をいだいています。高い倫理の持ち主と認めて、クリスチャンたちに尊敬の念は持つものの、何となく日本人ではなくなってしまった人々、普通の日本人の感覚では話し合えない人々とみなしてしまうのです。人間関係を大切にする日本人の感覚が、白黒、善悪、正邪を厳密に分けようとする態度に馴染まないのです。ところが注意深く聖書を読むと、わたしたちの神は善悪二分の神、白黒の神ではなく、灰色を理解される神、善悪の線引きを厳しくされない神、清濁併せ呑む神であるということが分かるのです。清濁併せ呑むというのは、自分で穢れに馴染み、汚れを身にまとうということではありません。あくまでも、自分の聖さあるいは高い倫理的水準を保ちながら、他者の汚れや穢れに寛容と忍耐を持ち、彼らの痛みや悲しみを理解して取り扱うことです。

Ⅳ．A．飲酒と喫煙

たいていのクリスチャンは、飲酒喫煙を罪と決め付けてしまいます。筆者も、酒タバコをやる人の健康保険料は、やらない人の倍にすべきだと思っています。酒を飲む人の車の保険料も、呑まない人の数倍にしても良いと、ひそかに考えています。今のままでは不公平です。でも、酒タバコを罪と決め付けることはしません。日本人の多くも、全体的に見て、酒タバコはあまりよくないと判断し、できればやめたほうが良いと言うのですが、悪いと断定せず、罪だと言い切らないのです。飲酒にも喫煙にも悪いことばかりではなく、よいこともあるのは確かだからです。そこで普通の日本人は、酒タバコを罪と断定してやまないクリスチャンを、底の浅い人間、融通の利かない輩、人間性を知らない者どもと見て、できればお付き合いをしたくない類の人たちであると、心ひそかに思ってしまいます。

聖書を素直に読むと、聖書は飲酒を罪と決め付けてはいないのがすぐに分かります。酩酊はふしだらな生活に陥る危険性があり、飲酒は注意深く行うべきだというのは、聖書の記されている教えであると充分にわかりますが、禁酒が聖書の教えであるとは断言できません。タバコは聖書に出てきませんので、「罪」と言い切ることはできませんが、神に与えられた体を壊す、あるいは火事などの害をもたらすという弊害は、充分に理解できます。それは非常に悪い習慣です。悪

い習慣をやめることは大いに勧められます。悪い習慣に陥るのは罪の力に捕らえられているからだともいえます。ただ問題は、そのような枝葉末節の悪習慣を「罪、罪」とことさら厳しく指摘するだけで、優しさ、人情、人助け、思いやり、忍耐、寛容などの、もっともっと大切なことを積極的に評価できないところが、クリスチャンの性格として目に付くことなのです。これは、キリストが厳しく非難し、自分たちの罪を自覚するようにうながした、パリサイ人と同質です。キリストがおっしゃったように、「ぶよは、こして除きながら、ラクダを飲み込んでいる」のです。（ぶよ=蚋＝蝿のような形をした非常に小さな昆虫で、人を始め、動物の血を吸う）。

キリストは事細かな律法を厳守して、「悪いことはしない」ということに徹底し、「良いことをする」というさらに大切なこと、「正義を行い、あわれみを行い、誠実を行う」ことを軽視していたパリサイ人を、厳しく非難されたのです。

酒を呑んでいても、タバコを吸っていても、そんなことは小さな問題です。人に優しく、困っている人を放っておけず、悪人に苦しめられている人を見て見ぬふりはできず、病気の人を見捨てられず、貧しい人に目を瞑っておれず、食べ物に窮している人がいたら、自分の食べ物を抱えて飛んでいくことが大切なのです。酒を呑んでいる奴、タバコを吸う奴と見下さず、彼らの痛みや悲しみと付き合い、喜びを共にし、祝いの宴に集うことが大切なのです。キリストも婚宴に集い、水をぶどう酒に変えてまで、お付き合いをされました。ぶどう酒がなくなってめでたい婚宴がぶち壊しになることを、お望みにはならなかったのです。キリストは美しい人間関係、人付き合いを無視するような方ではないからです。現在の日本のクリスチャン、ましてや宣教師や牧師に、酒がたくさんでる宴会に出席する勇気があるでしょうか。酒が切れたからと言って自ら買いに走るようなことが、考えられるでしょうか。それでは「証にならない」と言うでしょうか？　キリストは「大酒のみ」という悪口にも甘んじられたのです。（マタイ１１：１９）自分が酒を呑まないタバコも吸わないのはよいことです。しかし他人がそれをやっているからと言って、断定的に非難したり見下したりするのは間違いです。

Ⅳ. B. 嘘

もうずいぶん前になりますが、内村鑑三の著書のタイトルをもじった「余は如何にして基督信徒とならざりし乎」という本が、出版されたことがあります。長いあいだ宣教師と付き合いながら、クリスチャンになることができなかった多数の有名人たちが、その理由について書いた部分を集めた本です。それを読むと、彼らの多くは宣教師の高潔な生き方には感動しながらも、嘘を言ってはならないという宣教師たちの融通のきかない倫理、なんでも嘘か真実か、白か黒かと四角四面に捉える考え方、また、それを他の人にも強要することについて行けなかったと語っています。確かに欧米の宣教師、また彼らに育てられたりっぱな日本人クリスチャンたちは、嘘についてもかなり堅苦しい見解を持っています。ところが一般の日本人は、人間関係を円滑にするには嘘も必要であると考えているのです。

嘘の問題を取り扱うのにまず大切なのは、嘘の定義です。一人ひとりの間でも、「嘘とは何か」となるとなかなか意見の一致はありません。ましてや文化の違う人々の間では、ずいぶん異なっているからです。そのため、不用意に外国人と付き合うと、お互いに嘘つきと罵り合うことになってしまいます。ただ移住性の強い人々は、「嘘とは事実に反したことを言うことである」と、案外単純明快に考える傾向があると言えます。事実に生活の基盤を置いているために、彼らは、事実に反したことを言うことを、暮らしを破壊する最大の悪と考えているからです。ところが定住性の強い日本人のように、人間関係を最も大切と考えている人々は、事実を語ることよりも他

人を思いやる言葉を大切にします。

事実の上に生活を立てようとする文化の欧米で、冗談でも「俺は嘘つきだ」などと言うと、とんでもないことになります。まず、社会的信用は台無しになること請け合いです。また、「嘘つき！」と言うのは最大の侮辱になり、大喧嘩どころか、告訴にまで進むかもしれません。ところが日本では、「俺は嘘つきだ」というと、実に物分りのよい、酸いも甘いもかみ分けた人間だと思われるのです。「嘘つき！」という言葉も、ほとんど人を傷つけることなしに言うことができます。

日本語で、「山崎さん。たしか、お酒は召し上がらないとお伺いしましたが？」と聞かれると、山崎さんは「はい。いただきません」と答えるか、「いいえ。それが、結構行ける口ですよ」と答えます。ところが同じ質問を英語ですると、山崎さんは「はい」と「いいえ」を逆にしなければなりません。英語を習うときに戸惑うことのひとつです。英語では、尋ねている人がどのように考えているかなど、思いやる必要はありません。事実が肯定的ならば「はい」、否定的ならば「いいえ」と答える、ただそれだけです。酒は飲むという事実に基づいて、「はい。いただきます」と答えることになります。ところが日本語では、尋ねる人の思惑に配慮して、つまり人間の心を基盤にして答えます。そこで、「いいえ。あなたの予測に反して、わたしは酒を飲むんです」というところを短くして、「いいえ。いただきます」と答え、その反対は「はい。いただきません」となるのです。

嘘とは事実に反することだと考える、移住性の激しい文化に生きる人たちの間では、人間は、事実に直面して生きる勇気と力を持たなければならないと考えられます。ですから、癌になったら癌という事実に直面し、逃げ出してはならないのです。そこで医者も家族も、「癌です」と事実を告知するのが当たり前になります。ところが、定住性の強い文化では、人を思いやる心から語るのです。今になっても日本では、癌を告知すべきかどうかという議論がされています。癌を胃潰瘍だと言い続けるのは事実に反した嘘ですが、許される嘘、あえて言うならば、嘘ではない嘘なのです。イエス様が「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ答えなさい」とおっしゃった言葉を、欧米の人たちは、事実に忠実に「はい」と答え、事実に忠実に「いいえ」と答えることであると理解しますが、日本人は、心に忠実につまり誠意をもって答えることと理解します。日本では、癌のように困難な事実には一人で立ち向かうのではなく、みんなで力を合わせて立ち向かおうとします。そのような環境では当然、いつまでたっても自己の確立の出来ない、甘えた人間が出来てしまうことにもなります。日本人は確かに自立心に欠けています。「赤信号一人止まる勇気なく」、周りの者について行ってしまうのです。

定住性の強い思いやりの文化でも、人々は事実を語ることの大切さを否定しませんが、事実を曲げてでも言う、思いやりの言葉をさらに大切にします。ですからそのような中では、嘘とは事実に反して語ることよりも、誠意、善意に反して語ることとなるでしょう。もちろんこのような感覚は、たとえアメリカのような事実を基盤とした文化にもあります。いわゆる「ホワイト・ライ」といわれる善意の嘘です。また日本で言うお世辞に近い、リップ・サービスもありますし、ジョークという言い逃れの出来る嘘もあります。しかし、それらの出る幕が、日本に比べると非常に少ないのです。日本ではのべつ幕なしに出てくるのです。

宣教師や彼らに教えられた日本人クリスチャンたちの多くは、聖書が嘘を言ってはならないと教えていると思っています。ところが、実はそうでもないのです。「嘘を言ってはならない」と、十戒でも命令されているではないかと言われそうですが、十戒で語られ、その後もいく度かくり

返されている有名な戒めは、単に嘘を言ってはならないということではありません。それは「偽証」をしてはならないということで、訴訟や裁判の中での証言に関することで、日常の軽い出来事や会話の中での、思いやりで事実に反することを言うのとは別です。

くり返しますが、嘘が許されるかどうかを論じるには、どうしても嘘とは何かという定義が必要です。文化によって嘘の定義が異なるのです。ですから、細かく定義することなく文化の違う人と論じ合っても、始まらないところがあるのです。ただ、宣教師や牧師伝道者たちは、とかく、事実に反することを言うのが嘘だと主張し、しかもそれがキリスト教の教えであるかのように言うために、普通の日本人はキリスト教にはついていけないと感じてしまうのです。確かにそれは西欧的な装いを身につけたキリスト教ですが、聖書の教えるもともとの教えではありません。

聖書の中には、事実に反したことを言って許されている例がたくさんあります。アブラハムも、イサクも、ヤコブも嘘つきです。嘘を言って、イスラエル人の赤子を生かしておいた産婆さんたちは、神の祝福を受けました。幼子だったモーセも、嘘によって命を救われました。イスラエルの斥候たちが無事役目を果たすことが出来たのは、遊女ラハブの嘘のおかげです。多くのクリスチャンたちが尊敬してやまないダビデ王は、嘘つきもはなはだしい人物でした。騙され続けたペリシテ人の族長に同情したくさえなります。戦（いくさ）の中では、適を騙すこと、つまり事実に反することを言うのが戦略であったとしても、ダビデの場合は人間としての信義に反します。もっと言えば、パウロも立派に嘘を言っています。キリストさえ事実に反することをおっしゃっています。まだまだ、たくさんの例を挙げることが出来ますが、このくらいで止めておきましょう。

事実を基にした厳格な判断では嘘になることも、人間関係の中では嘘ではなく、「真実」となることもあるのです。文字通りの解釈と適用では罪になる行為も、その文字の陰にある真意を理解すると罪とはならないのです。キリストは、「神は犠牲を好まないがあわれみを好む」という旧約聖書の言葉を用いて、これを教えてくださいました。厳密な律法の解釈によれば罪であったことも、人を生かすという律法の精神をもって解釈すると、罪でなくなるのです。キリストが論じられたように、ダビデとその伴の若者たちは、祭司以外は食べてはならないパンを食べました。取税人や売春婦と食事を共にし、彼らの友となることは、「罪人と共に道を歩み、その座にすわる」ことであって、民の指導者には決して許されないことでしたが、キリストは救いをもたらす方として、より大きな「あわれみ」、日本的に言うならば「人情」という価値に照らして、それを変えてしまったのです。つまり、厳密な嘘の定義はさておいても、聖書によれば、嘘とは「事実」に反したこと言ったり遣ったりすることではなく、「真実に」反したことを言ったり遣ったりすることなのです。ほとんどのアメリカ人にとっては「事実」は「真実」なのですが、日本人にとっては「事実」と「真実」は、別なものです。

昔、神学校で「クリスチャン倫理」を学んでいたとき、アメリカ人教師が問題を出しました。「薄暗くなりかけた田舎道で、突然林の中から一人の女性が飛び出して、一目散に北の方角へ走り去ったとします。驚いていると、すぐあとから男が追いかけてきて、凶器を振りかざして『女はどっちへ行った』と尋ねました。クリスチャンとして、あなたはどう答えますか」ということです。驚いたことにこの教師は、「クリスチャンは常に真実であるべきで、事実を語るべきだ。その結果はどうなろうと、それは神にお任せすればよい」と主張したのです。筆者は「反対方向を指差して、あっちへ行った」と言うと答えました。それは事実に反していますが、真実だと思ったからです。クラスの中にいたインドネシア人は、「知らないと答える」といいました。

いったい嘘というのは何でしょう。間違って理解していたために、事実と異なることを言っていた場合は、嘘になるのでしょうか。口で語らないならば嘘にならないのでしょうか。見合い写真を美しくするために筆を入れるのは嘘ではないでしょうか。女性の厚化粧は嘘ではないでしょうか。子どもを褒めて褒めて育てるのは嘘にならないのでしょうか。美辞麗句を並び立てるのは嘘にならないのでしょうか。創世記が、六日間で神が天地をお造りになったという物語法を用いているのは、嘘になるのでしょうか。七日目に神がお休みになったという、擬人的表現は嘘になるのでしょうか。キリストによると、神がお休みになることはないのです。「木々は手を叩き」と聖書が言うとき、それは嘘でしょうか。太陽が東から昇るというのは嘘でしょうか。キリストがわたしは門である、ぶどうの木であるとおっしゃったとき、嘘を言ったのでしょうか。「嘘を言うと閻魔様に舌を抜かれるよ」というのは嘘でしょうか。嘘かどうかは、口から出たときに判断されるのでしょうか。耳で聞かれたとき判断されるのでしょうか。「あいつは信用できる奴だ」と親友に言われて信じた結果、とんでもない目に遭った。この場合、親友は嘘を言ったことになるのでしょうか。

日本人が嫌いなのは、真っ向から「嘘、嘘」と言い立てるキリスト教です。なんとも底が浅く、世の中を理解せず人間性を無視しているようで、付き合いきれないと感じるのです。

Ⅳ．C．性

性に関しての聖書の教えと、ピューリタン・ホーリネス・朱子学的キリスト教とのギャップについて書き出すと、おそらくそれだけで一冊の本になりそうですので、ここでは極めて原則的なことだけに止めておきましょう。

聖書を出来るだけ公平に読むと、つまり、文化という色眼鏡をはずして読むと、幾つかの重要な事柄が見えてきます。まず、性は神の創造になるもので、それ自体はとても大切で尊いものだということです。聖書には性に関する直接の教えのほかにも、性に関わる記述がたくさんあります。そこには性そのものを特別に汚いもの、汚らわしいもの、秘めて語らないもの、避けて通るべきものと見なす感覚はまったくありません。実におおっぴらであり、神に与えられた人間生活の一部分として、隠すことなく語られています。人間が性の間違った取り扱いをしたことも、あからさまに語られている一方、正しく用いられる性がどんなに素晴らしいものであるかも、高らかに謳われています。不注意に一読すると、あたかもポルノでも読んでいるかのような、おおらかな性愛の記述さえ幾度も出てくるのです。違いはポルノが情欲を掻き立てるために意図的に書かれているのに対して、聖書は本来の性のあり方を自由に美しく表現しているところです。

「日本が世界に誇る源氏物語」には、よく言えばまことにおおらかだった、悪く言えばまったくけじめのないものだった、平安時代の日本人の性感覚がよく表されています。朱子学の完成としてキリスト教を受け入れた、下級武士階級出身者の一人であった内村鑑三によると、これは読むに値しない淫らな小説ということになるのですが、聖書はちょうど源氏物語のように、性に対しておおらかなのです。日本古来の性感覚もとてもおおらか、あるいはけじめのないものだったにもかかわらず、主に朱子学の影響で、大変厳しい性倫理が強制されたことはすでに述べた通りです。朱子学の性倫理のもとで広められた誤解は、性を汚いもの、穢れたもの、不潔なものとして考え、取り扱うことです。その考え方が、性についてことさら厳しい態度をもっていた、ピューリタン・ホーリネス的キリスト教と結びついてしまったのです。

ただし聖書の性の取り扱い方は、源氏物語のようにおおらかだけで終わるのではないことも、言っておかなければなりません。聖書は、性が神によって造られたものであり、正しく用いられれば、つまり、神が与えてくださった目的に従って用いられれば、すばらしく美しく素敵なものであるが、誤った用い方をすると醜く汚いものとなり、人間を破滅に追いやるものだということを記しています。つまり聖書は、はっきりとしたけじめを持っているのです。

Ⅳ．D．欲情を持って女を見る

キリストは「情欲をもって女を見るものは、心の中で姦淫を犯したのである」とおっしゃいました。これは、一見、とても厳しい教えです。でも、心の中で考えたことと実際に行動に移すことには大きな差があります。キリストはここで、心で思ったことは実際に罪を犯したのと同じだと、教えられたのではありません。ただ、罪の根が心の思いにあることを指摘し、行動という実だけを責め、取り除こうとするだけでは足りないことを示して、心の変革の必要性をお語りになったのです。ところが、心に情欲を持って女を見たことは、実際に姦淫したのと同じであると解釈したために、クリスチャンになり損ねた日本人男性がかなりいるようです。男性だけではなく女性の中にも、これを自分に当てはめ、「欲情を抱いて男を見るものは姦淫を犯したものである」と考えて、躓いた人がかなりいたと思われます。なにしろ日本古来の性道徳は、よく言えば非常におおらかなもので、悪く言えばけじめのないものだったのです。それを何とかけじめのあるものにしようとして、誤った性感覚を教えたのが朱子学で、これは限られた武士階級や男の都合に合うように、女性に強要されたものに過ぎません。ですから、この朱子学的理解によるキリストの教えは、「人間性に反する」と考えられてしまったのです。

さらに、ここで言われている「女」という言葉は、もともと既婚女性を指すものだったとすると、また、かなり異なった解釈が生まれます。キリストの教えの背景には旧約聖書の姦淫についての教えがあり、そこでは、姦淫とは既婚女性との性的関係をさしていたのです。ですから、男性が性的欲望をもって女性を見ることが罪とされているのではなく、既婚女性を対象に欲望をいだくということが罪とされているのです。逆に女性の場合も同様です。また、日本語で使われている「情欲」という言葉も、明らかに「性的」欲望を意味して、少々、性のほうに重点が置かれすぎているように思われます。もともとのギリシャ語は性的な欲望も含みますが、もっと一般的に、自分のものとしてはならないものを自分のものにしたいという欲望を言うものです。ですから、女を見るという言葉から、「情欲」と翻訳されたのです。ただ、言語の意味からすると、「欲望をもって既婚女性を見る」ということだと考えられます。その場合の欲望には、当然性的欲望もかなり大きな割合で含まれるわけですが、それだけでもないのです。

キリストの教えの背景となった、旧約聖書の教えは十戒の中に含まれていますが、この場合、姦淫には、「隣人の妻を欲しがってはいけない」という注釈が加えられています。それは、隣人の家などの、所有物を欲しがるのと同じに扱われています。これは、妻を所有物と考える男尊女卑の文化の中で与えられた律法であるために、「そのような表現」が用いられたのであって、神が男尊女卑を定められたというわけでも、認めておられるということでもありあません。ただはっきりしているのは、聖書は、性欲自体を罪と言っているのではないことです。性欲自体は食欲や睡眠欲と同じものであり、神の人類に対するご計画の上で、絶対に必要なものとして造られているのです。旧約聖書が罪と教え、キリストも罪と責めているのは、他人の妻を自分のものにすることであり、他人のものとさだまった異性を、奪い取っても自分のものにしたいという欲望を持つこと自体が、すでに罪であるとおっしゃったのです。

ダビデが犯した姦淫の罪はとても良く知られています。彼は権力者として、当たり前のようにたくさんの妻を持ちました。でも、それは罪とは言われていません。ところが、ダビデが配下のウリヤの妻に欲望をいだき、これを自分のものにしたことは、姦淫の罪として厳しい叱責を受けています。他人の妻を自分のものにしたいと願うことは、考えてはならないことであり、隣人のものを奪うことだったのです。ですから、ダビデがウリヤの妻バテシバをとんでもない不当な方法で「我が物」にしてしまったとき、神は、それほどほしかったならば、他にいくらでも与えたであろうに、なぜ、こともあろうに他人の妻を求めたのかと、お責めになったのです。

神は本来、人を男と女とに造り、一夫一婦と定められたことは聖書をよく読むと分かります。ところが旧約の時代、まだまだ人間の理解が低く、道徳的な弱さや、経済の問題、女性の自立の困難さなど、様々な実情の中で、神は、旧約の時代には一夫多妻を認容なさったのです。旧約聖書に出てくる英雄たちのなかでは、一夫一婦だった人物はむしろ珍しいほどです。有名なギデオンもダビデもソロモンも、たくさんの妻を持っていました。サムソンには一夫一婦の観念はありませんでした。多くの妻を持ったことは、男にとって幸せとはならなかったことが多いようですが、神は一夫多妻制そのものを罪と断定されなかったのです。そこには、どんな事情のもとでも最善を無理押しするようなことはない、あるいは原則を厳格に適用するようなこともなさらない、神の寛容と柔軟性と包容性が示されているわけです。

Ⅳ．E．自慰

ところで若い男性、特に未婚男性クリスチャンの悩みを聞くと、多くの場合は性欲と自慰に関わるものです。性欲が強く、自慰を止められずに罪意識を強くして、自分は姦淫の罪を犯していると悩むわけです。そこで不遜な牧師である筆者は、「右目が罪を犯させるなら、切って捨てなさい。右手が罪を犯させるなら切って捨てなさいというのが、キリストの厳しい命令です。あなたの股間のものが罪を犯させるならば切って捨てなさい」と勧めます。それで、悩んでいる青年男性は「エェッー」ということになるのですが、そのように脅かしておいて、ここで言われていることが、単なる性欲ではないということを教えてあげるのです。

どういうわけか、クリスチャンは性欲自体を罪悪視することが多いようです。また聖書を読む人が、始めから性欲を罪悪視して読むためでしょうか。聖書は性欲を罪であると教えているかのように、間違って読み込んでしまうようです。確かに性欲はもっとも御しがたい欲望の一つで、しばしば悪魔のつけいる隙になってしまいます。ただし、すでに述べたように、性欲自体は神によって備えられたものです。正しく使えば良いものであり、間違って使うととても面倒なものです。

自慰に関しても、多くのクリスチャンが間違った聖書の読み方から、誤解をしています。自慰は英語で、「オナニー」とい言いますが、この言葉は、オナンという男が精を漏らし、神に罰せられて死んだという、旧約聖書の物語から来ています。それでクリスチャンの多くは、自分で精をもらすことが神の罰を受ける罪だと考え、自慰を罪悪視して恐れたわけです。しかし、オナンは自慰をしたのではなく、通常の性行為をする中で、意識的に精を外に漏らしただけです。なぜそのようなことをしたのかというと、彼は相手の女性に自分の子を産ませたくなかったからです。当時オナンが住んでいた地域の習慣では、子どもがないまま嫁を残して夫が死んだ場合、嫁は死んだ夫の兄弟によって身ごもり、夫の家を継続させなければならなかったのです。死んだ男の兄弟は、兄弟の家を絶やさないために、残された嫁に同じ血筋の子を与える義務を負っていたのです。ところがオナンはそれを嫌がって、精を外に漏らしたのです。それで彼は神の罰を受けるこ

とになってしまったわけです。自慰が罰せられたのではないのです。自慰は良いこととは言えないまでも、ことさら罪悪感を持つべきものでもありません。

多くの男性、特にクリスチャン男性は、夢精に対してもひどい罪悪感を抱いています。ところが、これも罪意識にさいなまれるべきことではないのです。言ってみれば、単なる生理現象に過ぎないのです。女性のメンスと基本的に同じです。健康な体を持った男性が成人していくと精子が製造され、少しずつ排出されていきます。その排出のとき、男性は、女性の生理の場合とは異なり、性的興奮あるいは快感を伴うことが多いということです。また、精子が蓄積されるとある程度の性的欲求が高まるのが男性の生理です。メンスの時期になると、性的欲求が強まる女性もいると聞いたことがありますが、似たような現象かもしれません。そこで、未婚の男性たちはその溜まった精子を輩出しなければならなくなります。それを人為的に排出させるのが自慰です。その自慰を自制しておし止め、激しい肉体労働やスポーツなどで抑制することもある程度可能ですが、抑制し続けると、多くの場合、夢精というかたちで、眠っている間に排出されます。問題はその時も、夢の中で性的興奮あるいは快感を伴うために多くの男性が、罪意識を持ってしまうということです。

女性には理解できないことですが、寝小便を思い出すとある程度理解してもらえるでしょう。小便が溜まるのも生理現象です。眠っている間だと、夢の中で小便がしたくなり、小便がしたい、小便がしたいと、便所や物陰を探すことになります。でもなかなか見つからず、やっとの思いで見つけ、ああよかったと気持ちよく開放感を味わって小便をすると、布団を濡らすことになってしまいます。男性の場合は精子が蓄積されると、同様のことが起こり、性的興奮と開放感と共に下着を汚してしまうのです。寝小便のときの開放感は単なる開放感ですが、夢精のときの開放感は性的快感が伴うため、罪意識を持ってしまうのです。

おおらかな性風俗の日本では、自慰に対してあまり強い罪悪感を持たないで来ましたし、婚外交渉や婚前交渉がかなり広く行われ、現代語では風俗の女性と呼ばれる人たちもたくさんいましたから、あまり問題とされなかったようです。ところが朱子学と混同したキリスト教に育てられた人は、婚外交渉などもってのほかですので、溜まった精子の処理に困り、自慰に行くわけです。そして罪の意識にさいなまれながら、これをおおっぴらに論じたり、牧師に尋ねたりすることができずに悩んできたわけです。くり返しますが、性は神によって造られたものであり、性欲もまた神によって与えられたものです。これがなければ、夫婦関係も成り立たず、「産めよ、増えよ」という神の命令も無になってしまいます。ただ、それをできるだけ正しく、神の目的に沿って管理しなければならないのです。

Ⅳ．F．結婚

性について人間に与えられた原則は、性交渉が結婚の中、夫婦の関係の中だけで行われるべきだということです。というよりも、神は性交渉そのものを結婚と認めておられると言ったほうがよいほどです。パウロが遊女と交わるものは遊女と一つになると教えている通りです。完全な定住生活に入る前のイスラエルでは、男女が同じテントに入るという表現が使われました。この原則から言うと、すべての性交渉が神秘としての結婚にあたり、結婚外の性交渉はありえないことになります。イスラエルで性交渉を表す一般的な言葉は「知る」で、アダムと彼の妻のときから、ヨセフと彼の妻に及ぶ長い期間にわたって用いられていましたが、性生活の神秘、あるいは奥深さが表現されている言葉であると言えます。

また、結婚には神が定められた神秘としての結婚と、社会制度としての結婚という二つの面があることに気づかなければなりません。本来、神が定められた神秘としての結婚と、社会的制度としての結婚は同一であるべきでした。ところが、人間が罪を犯して神から離れてしまったことによって、それが壊れてしまったのです。そこに混乱が起こってきたわけです。聖書的原則としては、結婚は一人の男と一人の女の性交渉によって成立するものです。その性交渉が成立したことが社会的に認められ、社会の制度に組み込まれたのです。ですから聖書の原則から言うと、一人の男と一人の女が助け合って生きて行こうと決心して、社会制度的に結婚したとしても、性交渉が成立しなければ、神が定めた神秘としての結婚は成立していないということになります。神は性交渉そのものにとても高い位置を与え、深い意味を与えてくださったのです。それは、たんに新しい命を生み出す行為だけではなく、深い人格的なつながりを体現する行為なのです。それは、キリストとその花嫁である教会との、深い神秘的関係を象徴するものでさえあるのです。

昔、日本のある地方にはとても興味深い風習がありました。婚約が整った男女は、親族や部落の長老から選ばれたものたちが、ふすま一枚隔てた部屋で待ち受ける中、初夜の床入りしたそうです。そして、性交渉が成立したことが確認されると、改めてみんなでお祝いをしたというのです。現代のわたしたちの文化では、いささか卑猥に感じることですが、当時のその地方では、これを恥ずかしいこととしてではなく、みんなが祝うめでたいこととして、大切にされていたわけです。なんとなく、昔のイスラエルに通じるところがあるように感じます。ところが罪に混乱したわたしたちの社会では、性欲のおもむくままに行われる性交渉が謳歌されるようになり、神が定められた、男女が一体となる結婚の神秘も、新しい命を生み出すという神秘も、制度としての結婚の重要性も軽んじられるようになってしまったのです。

人間以外の高等動物には、いわゆる発情期というものがあって、年間わずか数日から数週間の、子孫の生存に最も都合によい期間に、性交渉が成立するように造られています。ところが適齢期に達した人間は、いつでも性交渉が可能なように造られているのです。これは人間の性交渉が、単に子孫を残すための行為だけではなく、人間性の奥深くでの一致、交わりを表現しまた実現する行為だからです。性交渉が「知る」という言葉で表現された理由がわかります。サル類のあるものは、マウンテニングという性行為に似たポーズが確認されています。これは、サルの間での深い情を示すものだそうですが、不特定多数の相手との、頻繁な性交渉が確認される種類もあります。これも、繁殖行為とは関わりなく、挨拶の深まったものであろうと言われています。ただ人間の場合、神はこの性交渉を、夫婦間に限られた深い神秘的な交わりの表現として、止めおかれたのだと考えられます。このあたりに関しては、聖書に記述がなく、想像の範囲を出ませんが、大いに推測できるところです。

神は堕落した社会で罪の中に生きる人間のために、原則を示しながらも原則に固執せず、最善を示しながらも最善だけを追求させて失敗に終わらせることをせず、原則を現実に適応させて次善を求めることも、よしとしてくださったのです。わたしたちの神は、包容力のある神、柔軟性のある神、あるいは幅の広い神、懐の深い神、酸いも甘いも噛み分けてくださる神です。すなわち、本来一夫一婦制が原則だったにも拘わらず一夫多妻を認容し、資産である土地を子々孫々に伝えることを基本とした社会であったために、子どもがないままでの夫の死という事態には、制度的結婚を超えた子作りさえも認めてくださった神、清濁併せ呑む神なのです。

Ⅳ．G．離婚と再婚

離婚についても、原則の適応、あるいは緩和というなかに、神の寛容を見ることができます。

旧約聖書では、離婚が認められていました。ところがキリストの教えによると、離婚は本来、不貞以外の理由では認められないものだったにも拘らず、人間の弱さと無知に対する神の寛容の現れとして、認容されてきたということです。神は原則を振り回して、情け容赦なく人を裁く神ではないのです。罪に痛み、悩み苦しむ人の弱さを思いやり、人の悲しさをご存知で、原則を緩めてまで人を生かしてくださる方なのです。というより、そのような原則自体が、人を縛り付けるためのものではなく、人がより良く生きることができるため、より幸せに生を営むことが出来るために、人の道の指針として与えられたものなのです。「離婚してはならない。したら罰を与えるぞ」ということではなく、「人間は、本来結婚を継続すべきものとして造られている。だから離婚は人を不幸にする。個人を不幸にし、社会を混乱させる。だから、離婚をせずに結婚を継続するように努力しなさい」ということなのです。しかし現実として、結婚に縛られていては絶対に不幸に陥るケースを、離婚してはならないという法律で規制するのではないのです。

多くの教会が、離婚を認めていません。でも、罪の世の中で、自分の罪や弱さと戦って生きる中で、離婚が不可避なこともたくさん起こってきます。そもそもその二人が結婚したことが、間違っていたことが少なくないのです。あるいは社会的要因のために離婚以外の道がないこともあります。それを離婚は罪であると言って禁止して不幸に陥れるか、あるいは最善ではないけれども、次善で離婚を認めて、人間としての幸せをつかめるように努力させてあげるかの問題です。律法は、より良い人間生活のため、人間が幸せに生きるために与えられたのです。それを軽々しく破ることは間違っています。でもそれを四角四面に解釈してそのまま適用し、人を不幸に陥れるのも間違っています。少なくても聖書の教え、神のお取り扱いは、このように柔軟性があるもので、人間の事情に深い配慮が払われているのです。善悪、白黒の世界ではありません。

再婚もまた同じです。キリストは、離婚をした者が再婚するのは、姦淫の罪を犯すものであるという原則を示してくださいました。でも再婚をした者は罪を犯しているのであるから、離別しなさいとはおっしゃいませんでした。また、それは姦淫の罪だから、石で打たれなければならないとも語られませんでした。むしろキリストは、姦淫の罪を犯していた人々、あるいは遊女たちに近づき、その人々に救いを届けるために、彼らとの交わりを大切にされたのです。第一降臨のキリストは、世をさばくためではなく、世を救うためにおいでになったのです。教会は、第二降臨の裁き主キリストの代理ではなく、第一降臨の救いのキリストの大使なのです。

Ⅳ．H．姦淫と不品行

すでに触れたことですが、聖書がいう姦淫とは、結婚している女性を自分の性行為の対象とすることです。これは当時の男性社会の風習に倣った表現ですが、現代流に男女同等の社会感覚から言うと、他人と結婚している異性を、性行為の対象とすることです。それに対して不品行とは、婚姻関係外の性交渉及び性行為です。

聖書は不品行を罪として語っていますが、姦淫ほどの罪とはしていないと思われます。また、男尊女卑の社会にあっての表現ですが、姦淫や不品行については、女性に対して、より厳しく語られています。女性が自立して生きることが難しい社会形態の中で、女性の姦淫や不品行がより多くの問題を生み出すことを考えれば、ある程度納得できるところがあります。

ところで、聖書の律法は姦淫や不品行の罪に対して、死刑をはじめとしてかなり厳しい刑を科していますが、様々な社会実情に合わせて、あまり厳しく適用されていなかったことが窺がわれます。それは、遊女と呼ばれる女性たちが生活していたことからも、推定することが出来ます。

キリストの時代もそのような女性たちがいました。それは社会が彼女たちの存在に寛容になっていた、ある意味で堕落していたとも考えられます。そのような堕落を、神は忍耐をもって許しておられたということでもあります。神の基準はあくまでも高いのですが、罪に陥った人間に対して、非常に寛容なのです。

罪人に対する神の寛容さは、キリストの彼らに対する態度にとても良く現れています。キリストは遊女たちを裁きと軽蔑の対象としてではなく、救いの対象として見、また取り扱っておられます。姦淫の罪を犯した女に対しても、多くの罪人たちと同様に、キリストは救いを必要としているものとして、接しておられます。そればかりか、そのようなキリストの態度を批判した人々に対し、キリストは、神が求めておられるのは犠牲ではなくあわれみであると、厳しくお答えになりました。

神は、ご自分とイスラエルの関係を夫と妻の関係にたとえ、イスラエルをいくたびも夫を裏切る不誠実な妻、姦淫の妻として語り、その妻をどこまでも愛し続け、捜し続け、自分のもとに帰るように呼びかける夫を、神ご自身として語っておられるのです。イスラエルが分裂してユダ王国が出来ると、神はイスラエルを姉、ユダを妹として取り扱い、二人の淫行を激しく責めておられますが、それでも、夫であるご自分のもとに帰ってくるように呼びかけておられるのです。ホセア書に記されている物語など、理解して読むと、胸がつまる思いです。これらのたとえや物語から、イスラエルの神がただ清廉潔白な神というだけではなく、実に清濁併せ呑む神であることがわかります。

Ⅳ．Ⅰ．安息日

日曜日には何が何でも教会に行く。家族や親戚の都合も、学校や職場、あるいはとなり近所との付き合いも放り投げて、絶対に礼拝会に出席するようにというのが、おおかたの教会の教えです。多くの牧師は、日曜日は新約時代の安息日であるなどと、聖書も歴史も知らない信徒たちを騙して、絶対に日曜礼拝会に出席させようとしています。あるいは牧師たち自身が、信徒時代からこの間違った教えに騙され続けている場合のほうが、多いのかも知れません。日曜日に学校行事を行うのは、信教の自由に反すると、裁判所に訴えた牧師がいるそうですから、まじめに事実に反したことを信じ続けているのでしょう。

安息日に関しては、筆者はすでにいろいろなところで述べ、また書いていますので、少しばかり重複するのをお許しください。旧約時代、安息日は非常に厳しく守られていました。これを破ったために死刑になった者さえありました。ところがキリストは、幾度も安息日を破って活動したばかりか、それを正当化しておられます。そのことがキリストの逮捕と死刑につながってさえいるのです。キリストは安息日のために人があるのではなく、人のために安息日が設けられたのであると、安息日の原則を示してくださり、安息日を厳密に守ることによって人に危害が及ぶようなとき、あるいは、緊急に助けを必要としている者に助けが届かなくなるようなとき、さらにはキリストの働きという最重要目的の遂行に、妨げとなるような場合、躊躇なくこれを破り、自分にはそうする権威があるのだとおっしゃったのです。ある場合には、弟子たちが不注意に安息日を破ったことさえ弁護して、安息日に対して当時の人々が持っていた、厳格な律法主義的感覚の間違いを正しておられます。（マルコ２：２３－２８）その時のキリストの論拠は、困窮のダビデとその一行が、祭司以外には食べてはならないパンを食べたという出来事でした。通常の場合の定めごとを、緊急の必要の場合さえ頑なに守り通して、困窮している人々を助けないようではいけないのです。キリストは厳格な律法主義者ではありませんでした。白黒、善悪で、短絡的

に物事を判断する方ではなかったのです。

キリストは、神が創造の第七日目に働きを休まれたのであるから、人間も第七日目を安息日として休まなければならないという、創造にまつわる極めて重要な記述に、新しい解釈を持ち込まれました。というより、本来の正しい解釈を説かれたのです。それは、神が第七日目に休まれたから人間も第七日目に休めということではなく、人間は七日に一日の割合で労働を休み、神を礼拝するのが、肉体的にも精神的にも、霊的にも最善に造られているのだから、第七日目に休めということです。それを、単純な理解で単純な生活をしていた人々がしっかりと守り通すように、第七日目に神がお休みになったという物語を造って、お教えになったのです。事実に反することを嘘と定義する西欧的クリスチャンには、到底受け入れられない聖書理解ではありますが、人間関係を大切に考える文化の人間には解るはずです。また、物語を通して、基本的な重要事項を教えるということも、事実を大切にするあまり、物語という創作で教えるということに違和感を覚える人たちには、理解できないことです。キリストは旧約聖書の記述に反して、神がお休みになることなどはないと教えられたのです。つまり、神が七日目に休まれたという記述は事実ではなく、そのような言い方で、人間にとって大切なこと、重要なことをお教えになったというわけです。

十戒において安息日が定められ、これを厳格に守るように命令された背景には、そうされる強い必要性があったためです。モーセによってエジプトから導き出されたイスラエル人たちは、ただエジプトから導き出されたのではなく、それまでの奴隷の生活から解放されたのです。数約年にわたて奴隷生活をしていたイスラエル人たちは、自分たちの生活設計を立てることも、日常の計画を作ることも知りませんでした。基本的に、命じられるままのことをする生活だったからです。そこから解放されて自由になったのです。自分たちで生活設計を作りあげる基本が必要でした。計画を持つ生活が必要となったのです。そうしなければ、数十万人に及ぶ解放奴隷からなる避難民の社会が、崩壊してしまうことが明らかだったのです。そこで、基本となる６日間の労働日と、１日の休日が定められたのです。

イエス様の時代には、すでにイスラエルは長い定住生活をしていて、人々の生活も高度で複雑になり、単純にすべての人が同じ日に休むことなど、社会的にも困難になっていたのです。それなのに、人々は無理をして、犠牲を負いながらもなんとかして安息日を守り、正しい人と認められようと努力をしていました。そのうえ偽善者であった宗教家たちは、安息日を厳格に解釈しただけでなく、枝葉末節にいたる細則を付け加え、人の生活をぎりぎりまで拘束していました。キリストはそのよう当時の安息日の習慣にこそ、安息日の原則にもとり人間性に反するもの、人間の生活に益とならないものとして、それと戦われたのです。日本のように労働時間が長く、日曜日も出勤という人々も珍しくない環境で、学校や地域の活動が日曜日に集中する中、あらゆる人間関係の悪化と生活環境の劣化を知りながら、日曜日安息日説を主張して礼拝出席を強要するのは、まさにキリストが大嫌いなことに他なりません。もちろん、すべての犠牲を覚悟の上で、信仰をもって礼拝出席を実行している人を非難するつもりはありません。そのような信仰には、神が最善に答えてくださることでしょう。ただし、それをすべての信徒、ましてや信徒でもない人たちに求めるのは大きな間違いです。教会がもっと柔軟性と多様性を持って、日曜日以外にも礼拝会などの活動をすれば済むことです。ちなみに筆者は高校一年の冬から教会に出席しだしましたが、それから、高校卒業のときまで、礼拝会も含めて、教会の集会を休んだのは唯の一度だけです。金曜日の午後に盲腸の手術をしたため、日曜日に礼拝会に行こうとする筆者の服を、牧師が取り上げて持って行ってしまったためです。日曜日に行われる学校行事は、自分の卒業式も含めて、すべてボイコットしたものです。このようなことは、それぞれの信徒の信仰によって決定

すべきことであり、礼拝出席を安息日に結び付けて強要するのは、正しくないのです。

聖書に示されている神は、まさに人情の神、あわれみの神、人を助けるためには厳格な律法さえ、まげて下さる神です。神は律法を曲げてくださったのではありません。律法とは本来、そのように扱われるものなのです。それを理解できなかったユダヤ人たちが、誤って四角四面に律法を解釈し、人間性に反した適用をしていたのです。

Ⅳ．J．男女同等

不注意に聖書を読むと、神は性差別を設けているように思い込んでしまいます。男女同権を主張する人たちは、聖書は性差別をしている時代遅れの書物だと攻撃します。ところが、これこそ人間の弱さ、足りなさ、不完全さ、罪深さに神が対応してくださったことであり、神様の清濁併せ呑むお姿が現れているのです。

神は男女を同等の存在として創造してくださいました。それは、新約聖書でパウロが明らかにしています。また、キリストの御言葉にも、それを読み取ることが出来ます。しかし、旧約聖書の時代から今日に至るまで、世界中の文化のほとんどは、男女が同等であることを認めていません。理念や宣言では同等であり同権であると謳いながら、実質的には差別が当然のように行われているのです。性差別は、最も広く行われている間違い、神の創造の原則に反することです。ところが神は、この問題を取り上げて人々を叱責してはおられません。かえって、そのようなことを行っている文化の中で、あたかもそれを当然であるかのように認容しながら、その文化の中に生きる人々に働きかけ、女性の幸せのための律法を与えておられるのです。

女性が差別されているのは確かに間違いです。それは現代のわたしたちが、より高度な理解で言えることです。しかし、神は女性運動に加わっている人たちのように、「筵旗を揚げる」戦い方をしません。女性が大切にされ、女性の幸せが大切にされている限り、神はそれについて何もおっしゃらないのです。世の中には差別が満ちていました。今も満ちています。世界中、様々な差別でいっぱいです。神は、そのような差別一つ一つを取り上げて糾弾することなく、じっと忍耐をもって人間の成長を待っておられるのです。男女同権、あらゆる差別の撤廃と、声高に叫ぶ現代のわたしたちは、聖書が男女の差別を認めているような記述に、大いに反発するのですが、むしろ、罪深い人間の罪深い社会に、神が忍耐を持って対応してくださっていると理解して、感謝すべきなのです。

Ⅳ．K．奴隷

現在の日本に、奴隷は存在しません。奴隷制度が人間性に反する制度であることも知っています、だからわたしたちは、聖書が奴隷の存在を認めていることに違和感を持ち、時代遅れだといいます。でもそれは、現代の目で歴史の出来事を裁く間違いです。それは男女同権の問題も同じです。確かに聖書は奴隷制度を認めています。神は 2,000 年から 3,000 年以上も前の奴隷制度が存在する社会に対応して、聖書をお与えになったのです。たとえ、奴隷制度や男女の不平等などによって、ご自分がお造りになった人間のあり方が損なわれていても、忍耐をもって、そのようなことをしている人間を愛し、恵み、ゆっくりと時間をかけて、彼らを正しい方向へ導こうとされた記録が聖書なのです。神は、人間社会のあり方を、余程の悪に満ちていない限り寛容と忍耐をもって許し、人間が神の教えを理解して、自分たちの生き方と社会を変えていくことを、望ん

でおられるのです。

神は奴隷制度の存在を、寛容と忍耐をもって認めてくださいましたが、一方では、奴隷制度に真っ向から対立する愛と平等の教えを与え、それが根付くように計らわれたのです。とくに、奴隷制度が社会の重要な基盤であったローマ世界の中で、奴隷に関わる具体的問題を取り扱ったピレモンへの手紙には、奴隷制度を認めてその制度の中での解決法を語りながら、奴隷制度を根本的に変えてしまう教えが含まれているのです。そして事実、その教えに目覚めた人々が、奴隷制度を無くす力になったのです。

ちょっと視点を変えてみましょう。現在わたしたちは資本主義の中で、自由貿易を推し進めるグローバル化の世界に生きています。でも、その矛盾がそこここに現れ、世界の貧富の差が拡大し、毎年、数千万人が餓死し、さらに多くの人々が、栄養失調や過酷な労働条件の中で苦しんでいます。一方ではまったく何も生産せずに、コンピュータを操作して金を右から左に動かし、株をあちらからこちらに移すだけで、巨大な利益を上げている人々がいます。彼らは、自分たちのやっていることのために苦境に陥れられている貧しい人々に、少しの思いやりも見せません。

日本はバブルがはじけて二十年近く、経済不況の中にありますが、それでも、多くの開発途上国の人々の苦しみとは程遠いものです。たくさんの食料が食べ残され、捨てられています。それは貧しい人々の乏しい食卓から、合法的に奪い取って無駄に捨てているということです。まだまだ使えるものが、たくさん焼却されています。このような社会を、百年後、二百年後の人々はどのように見るでしょうか。今生きているわたしたちクリスチャンの、愛や助け合いの倫理をどう評価するでしょう。

だからと言って、今、誰かがこの資本主義世界の自由経済を変えなければならないと、急激な改革を行おうとしたらどのようなことになるでしょう。わたしたちは不完全な社会に生きる罪人です。神がご自分の厳しさ、聖さ、気高さの基準でわたしたちを取り扱われるならば、わたしたちはたちまち滅びる以外に道はないのです。まさにわたしたちは神のあわれみのゆえに、生きることを許されています。ご自分は完全に聖い方でありながら、穢れた人間の存在を許し、その人間を救おうとなさる神は、まさにそれだけで充分すぎるほど、清濁併せ呑む神なのです。神はご自分の聖さによってわたしたちを取り扱わず、またわたしたちの罪の深刻さに応じて私たちをあしらわず、ご自分の聖さを犠牲にしないで、わたしたちを許す道を備えてくださったのです。

Ⅳ．L．大罪と小罪

日本人がキリスト教を嫌うのは、こと細かな事柄までいちいち、「罪、罪」と言い立てるところです。クリスチャンにかかると、何でも罪になってしまうのです。会社の慰安旅行も、お花見も、忘年会も、コンペも、カラオケも、さらに、日曜日の学校行事も、町内会の催しも、村祭りも、盆踊りも、お盆も、お墓参りも、パチンコも、競輪も、競馬も、挙げ出すときりがありません。ローマ書の一章に列挙されている二十一の罪を綿々と解き明かして、わたしたちの罪深さを責め、悔い改めを迫る説教を聴いたことがあります。そのような説教も、すべてが間違いではありませんが、ポイントをはずしていると言わねばなりません。

ローマ書一章が糾弾しているのは、人間が創造主である見えない栄光の神の姿を、見える動物などの姿に似せた偶像に変え、愚かな誤った礼拝をしているという、大きな罪、罪の源です。たまたま二十一も列挙された罪は、正しい神を礼拝しないという大きな罪の結果として起こった、

枝葉末節の罪に過ぎないのです。わたしたちの生活に現れるさまざまな罪は、真の神を礼拝していないという、一つの根源的な罪から派生するものであり、小さな罪を厳しく責めて取り除くのではなく、真の神を正しく礼拝することに戻らなければならないのです。

具体的な罪を一つひとつ指摘して責めるのは、神を知らない異邦人に対する正しい罪の指摘の方法ではありません。神を知らないという極めて原則的な大きな罪が、まず指摘されなければならないのです。悔い改められなければならない罪は、飲んだとか、暴れたとか、騙したとか、争ったとか言うことではなく、神を神として認めなかった罪です。神に感謝しなかった罪です。神を賛美しなかった罪です。神を礼拝しなかった罪です。その根源的罪が正しく理解されて初めて、小さな罪も罪であると正しく理解されるのです。

とはいえ、筆者はこれまで、偶像礼拝の罪を取り立て責め立てる間違いを、たびたび指摘してきました。偶像礼拝は罪ですが、真の神を知らない、また、真の神を礼拝する方法も知らない人々に、偶像の罪を責め立てても始まらないのです。「偶像、偶像」と責められること、それこそ、日本人がいちばん毛嫌いすることです。大切なのは、天地創造の神を紹介することです。その神の恵み、祝福、助けなどをお話して、理解してもらうことです。創世記と出エジプト記を注意深く読むと、罪が責め立てられる前に、神の自己紹介があるのです。天と地を創造された神の存在と力、恵みと助けを絶対に否定することが出来ないほど明らかに、神が自己啓示をしてくださってから、「その後に」、律法が与えられ、罪が指摘されたのです。まず、神が明らかにされなければ、罪を叫んでもあまり意味がないのです。天地創造の神と、その祝福と助け、恵みと憐れみを理解してこそ、この神を信じないできたこと、感謝もせず、賛美もせず、信頼もせず、無視したまま、無頓着に生きてきたことがどんなに大きな罪であるか、分かるのです。そうしたとき初めて、本当の悔い改めが出来るのです。（この件に関しては拙著「これからの日本宣教」を参照）

特に、日本古来の神道は、偶像も持たず、聖書の教えている神にとても近い感覚なのです。神道は神学ではなく、つまり教えではなく、日本人の宗教感覚です。聖書がなかった日本人の神感覚が、いかに聖書の教えていることに近いかを、わたしたちクリスチャンが知るべきです。知らなければなりません。神道を偶像礼拝と敵視するだけではいけないのです。日本人が、「なにごとのおわしますかは知らねども、ありがたさにぞ涙こぼるる」と、知らないまま有難がって来た神こそ、わたしたちが信頼している天地創造の神であることを教えたらよいのです。毎日よく分からないまま、太陽や山などに手を合わせてきたけれど、本当はそれらの背後におられる天地創造の神を、人間として与えられている霊的本能で感じて、祈ってきたのだということを説明してあげればよいのです。

クリスチャンたちが、非常に日本的な宗教観念であると感じて、嫌悪感を持って退ける、「分け入れる　ふもとの道はおおけれど　同じ高嶺の月を見ゆらん」という歌も、むしろ、積極的に捉えるべきです。日本人は八百万の神々を始め、世界中の多くの宗教を認め、それらの行き着くところは同じだと感じています。もちろんそれはとんでもない間違いですが、そこには非常に強い唯一神的感覚があるのです。それを捉えればよいのです。「知らないできた。間違った礼拝の仕方をしてきた。しかし、真心から礼拝してきた彼らを認めてあげればよいのです。そうするとわたしたちは、外国から来た外国人の神ではなく、日本人が知らないまま礼拝し続けてきた神を、わたしたちの天地創造の神として紹介できるのです。

神は偶像礼拝の罪さえ、直ちに刑罰をもって臨むことなく、忍耐深く見逃してこられました。それは人々が神を知り、正しく礼拝することを学び取るためであり、彼らの偶像礼拝を責め立て

るためではないのです。そのために神は、ご自分でみ子キリストの十字架という犠牲を払ってまで、人々が神のもとに来ることができるように、準備をして下さったのです。神は人々の罪に対して、あくまでも寛容なのです。それでいてご自分の聖さを犠牲にはなさらないのです。まさに、清濁併せ呑む神です。それなのに、「わたしたちのキリスト教の神」は、みみっちく、せせこましく、「罪、罪」と重箱の底をつつくだけの神になってしまっているのです。

結び

神が受け入れてお用いになったのは、清廉潔白な人生を送っていた人々ではありません。パウロのように、清流の鮎のような人物もいたにはいたのですが、大概は田沼の中に生きていた泥鰌のような人間でした。鮎だって、コケという汚れを食べるために、臭い魚です。アブラハムにしても、キリストの高い倫理標準に照らすと相当見劣りがします。イサクにしても少々疑問です。ヤコブに至ってはどうしようもありません。師士記の勇士たちなど、「何でこれが聖書の中に？」と思われる人物たちです。神様はそのような人物たちを用いてくださったのです。ダビデの嘘については触れましたが、けっして清廉潔白な人間ではなく、罪の血が血管にみなぎっていました。偉大な人間たちでさえそうだったのです。市井の人間たちについては「何をかいわんや」です。

神はまったく聖い方であり、ご自分に従う者たちがご自分のように聖くあることを望み、その高い基準を示しながら、泥まみれの人間、罪に転び汚れにまろぶ人間を見捨てず、放さず、拾い上げてはみ許に引き寄せてくださる神、まさに清濁併せ呑む神なのです。そして、この清濁併せ呑む神ならば、日本人にも理解され受け入れられるはずです。清濁併せ呑む神を信じる清濁併せ呑むクリスチャンが、清濁併せ呑む文化で生きる日本人に、清濁併せ呑む神の福音を語るのです。聖でありながら濁を理解し、濁の中に生きながら聖を失わないクリスチャンの生き方が、証となるのです。